

初期仏教経典である『小牛飼い経』（中部）第34経）において釈尊は、牛飼いが牛達に河を渡らせる比喩を説く。無知な牛飼いは岸の此彼をよく見ずに不適切な渡し場から牛達を渡そうとし、結果的に牛達は水の流れに吞まれてしまう。対して智慧ある牛飼いは、岸の此彼をよく見て、適切な渡し場からまず首領牛・父牛を、次いで力があり慣らされた牛を、というように順次牛を渡し、最終的にすべての牛を渡り切らせている。

この比喩のうち、無知な牛飼いは外道の沙門・バラモンを喩え、智慧ある牛飼いは釈尊を、河の流れは魔の支配する領域（三界即ち輪廻の世界）を、牛は弟子達を喩えている。釈尊はこの比喩を通じて、師とすべき人物の言を信じる者には利益・幸福が訪れると説いているのである。誰（何）を信じていくかによって人の幸・不幸が決まってしまふ点は、宗教のみならず現代世間一般にも通じることであるが、牛飼いの比喩は、二千年以上前の異国の思想を現代に生きる我々に実感をもって伝える力強さをもっている。

仏典に見る比喩の力

古川洋平

本経の末尾には偈頌が説かれる。そこで釈尊は、「あの世とこの世をよく知る仏により、安穩たる『不死の門』は開かれている。悪しきもの流れは断ち切られている。君達は安穩に達せよ」（趣意）と弟子達に語る。「悪しきもの流れ」とは先の比喩を用いて説明された魔の領域であり、「不死」とはその対極にある涅槃である。智慧ある牛飼いたる釈尊は、河の流れの向こう側（不死に至る道筋を牛たる仏弟子に説いている。「不死の門」は梵天勸請の際に釈尊が説法を宣言する偈頌にも登場する語であり、ここに仏教流布の原点を見出すことも可能であろう）。

その他、『法華経』七つの喩えをはじめとして、仏典には多種多様な動物・植物や自然を用いた比喩が登場する。これらの比喩は、時を超えて我々に多くの示唆を与えてくれるとともに、古代インドの生活や考え方を色濃く反映している。思想的な背景とともに、文化的な視点からも比喩は注目されるべきであろう。

（ふるかわ ようへい／東洋哲学研究所委嘱研究員）